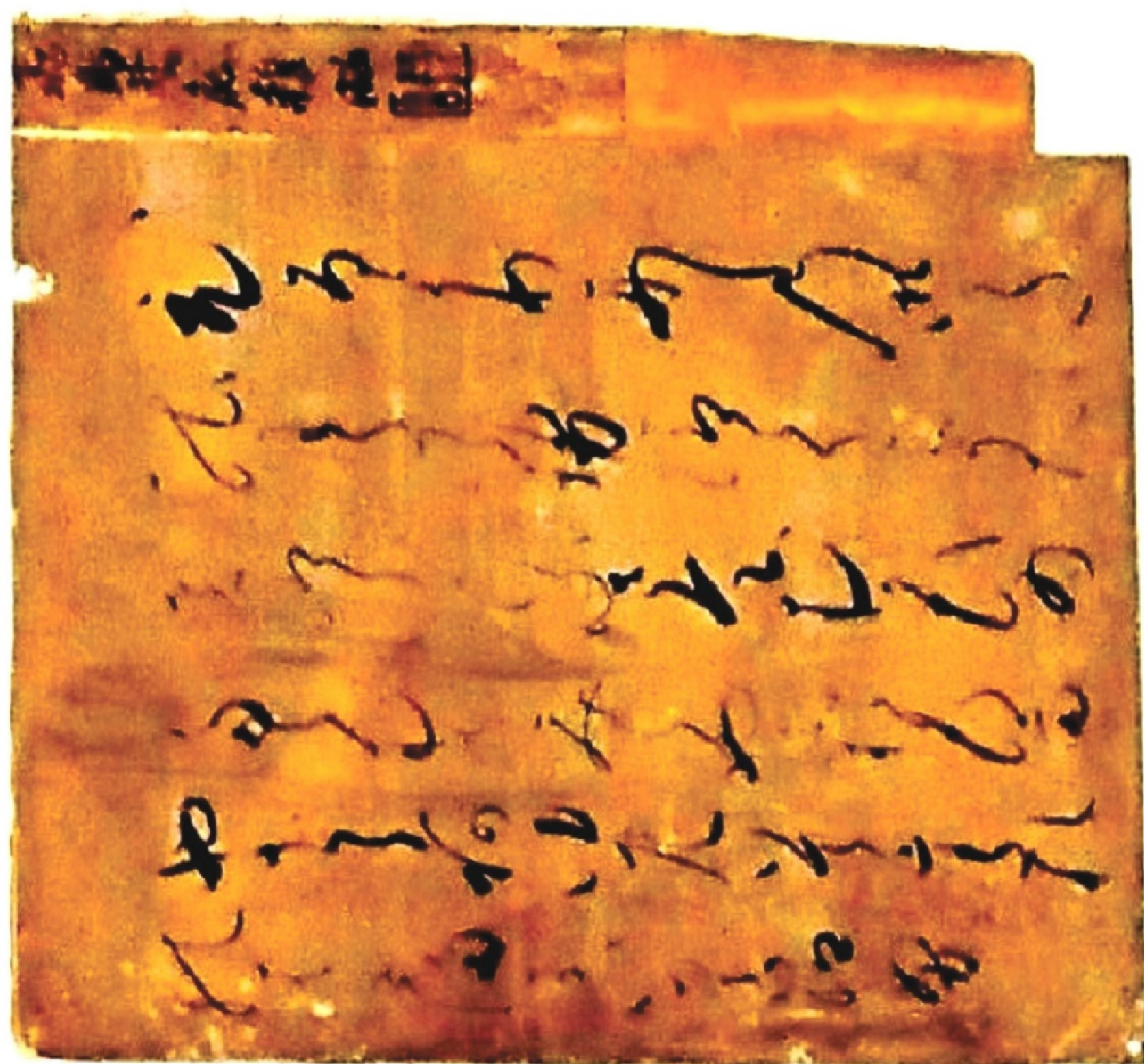


第三帖 空蝉



第三帖 空蝉



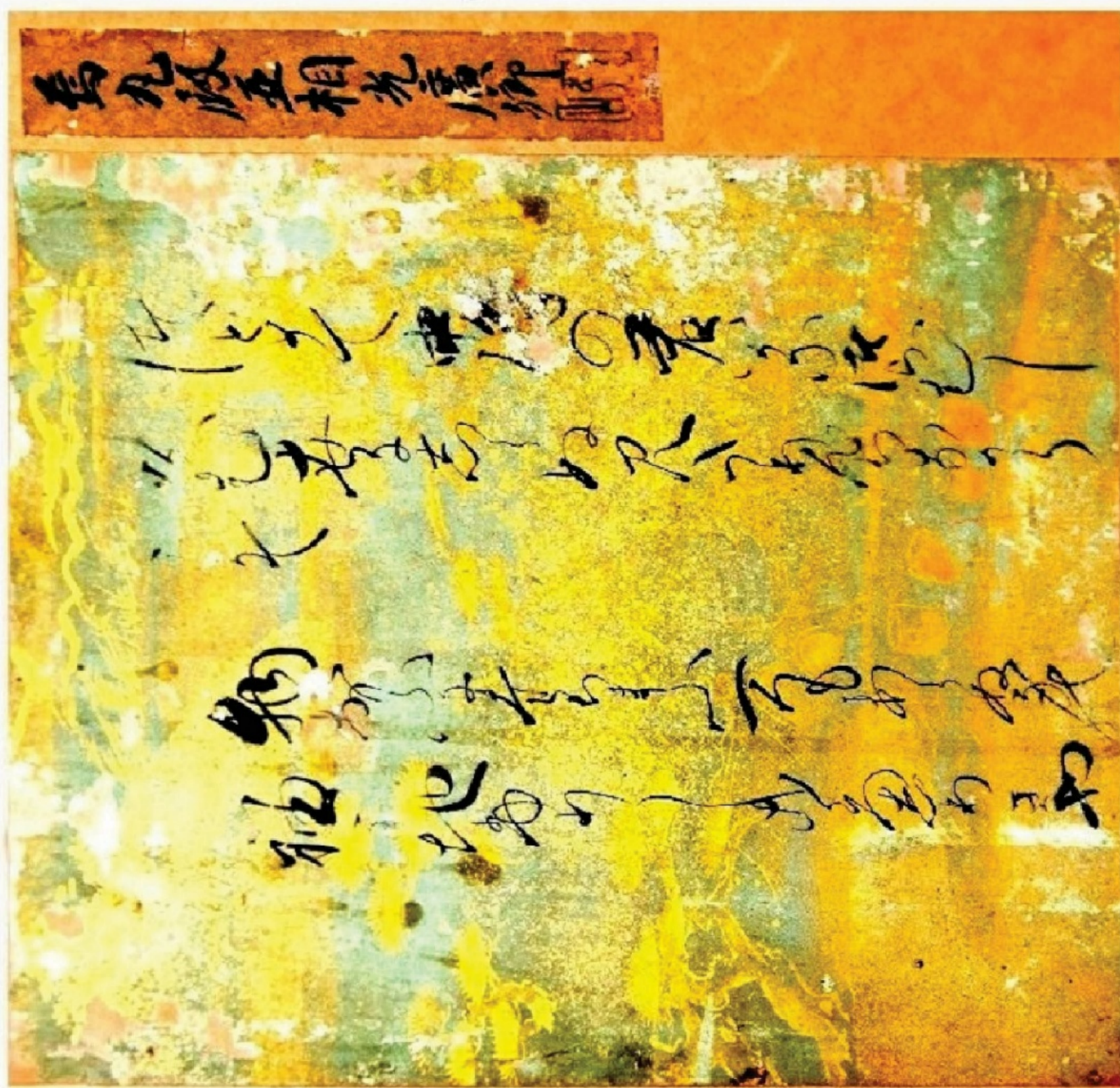
第四帖 夕願



第七帖 紅葉賀



第七帖 紅葉賀



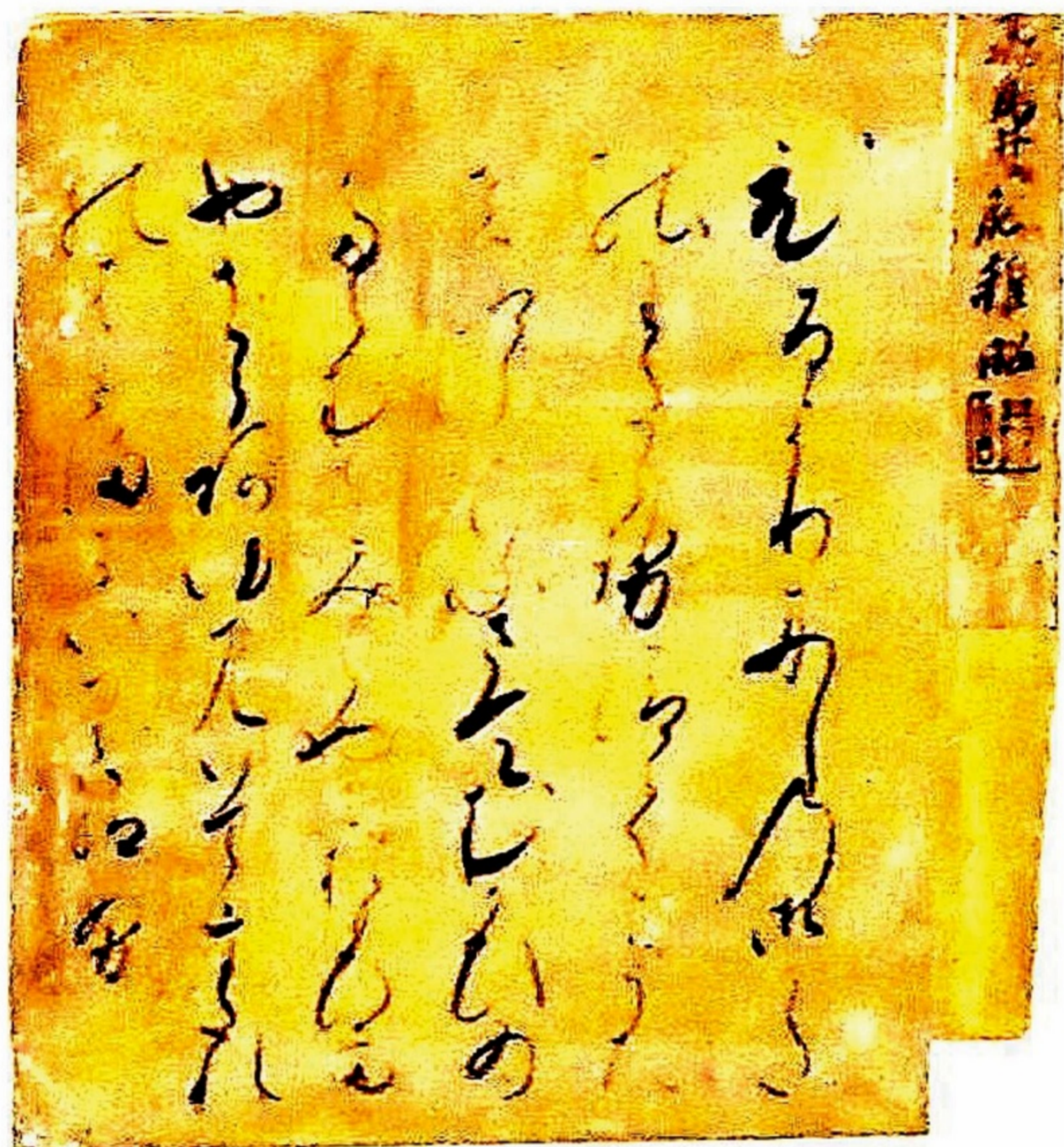
第八帖 花宴



第十帖 賢木



源氏物語図扇面詞書解説



第三帖 空蝉 (大島本)より

本文

渋谷栄一訳

与謝野晶子訳

ひる にし おほんかた わた
「昼より、西の御方の渡ら

せたまひて、碁打たせたまふ」と言ふ。

む さて向かひみたらむを見ばや、とおもひ

て、やをら歩み出でて、すだれ 簾のはさ

まに入りたまひぬ。

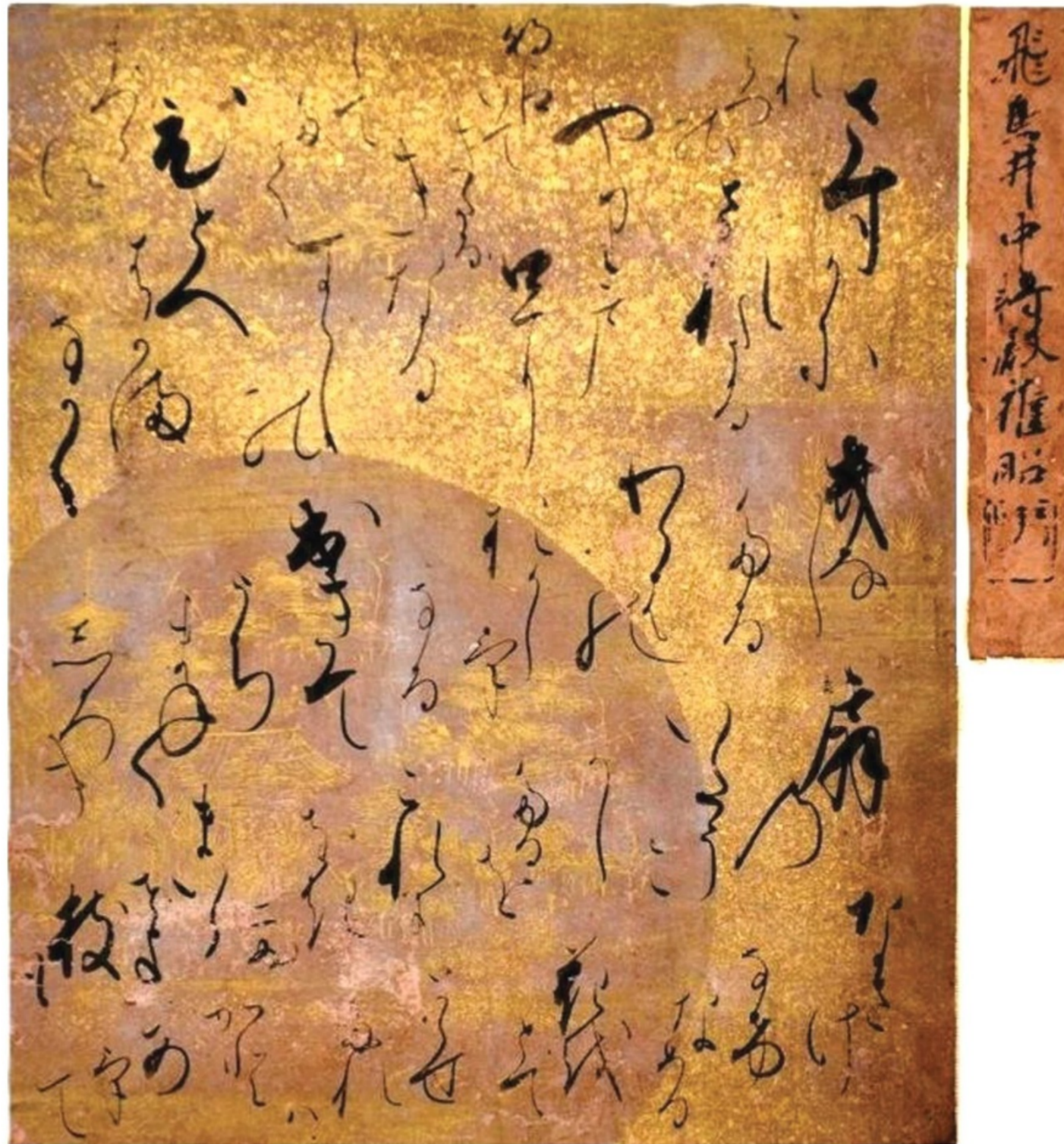
「昼から、西の御方がお渡りあそばして、碁をお打ちあそばしていらっしゃいます」と言う。

そうして向かい合っているのを見たい、と思って、静かに歩を進めて、簾の隙間にお入りになった。

「お昼から西の対—寝殿の左右にある対の屋の一つ—のお嬢様が来ていらっしゃって碁を打っていらっしゃるのです」

と女房は言った。

源氏は恋人とその継娘が碁盤を中にして対い合っているのをのぞいて見ようと思って開いた口からはいって、妻戸と御簾の間へ立った。



第四帖 夕顔（大島本）

光る源氏の十七歳夏から立冬の日までの物語

第一章 夕顔の物語 夏の物語

本文

渋谷栄一訳

与謝野晶子訳

やりどぐち
 さすがに、されたる遣戸口に、
 きすずしひとへばかま
 黄なる生絹の単袴、
 ながきわらは
 長く着なしたる童の、をか
 いきまね
 しげなる出で来て、うち招く。
 しろあふぎ
 白き扇のいたうこがしたる
 を、

おまゐ
 「これに置いて参らせよ。
 えだなさはな
 枝も情けなげなめる花を」

そうは言うものの、しゃれた遣戸
 口に、黄色い生絹の単重袴を、
 長く着こなした女童で、かわいら
 しげな子が出て来て、ちょっと招
 く。
 白い扇でたいそう香を薫きしめた
 のを、

「これに載せて差し上げなさい
 ね。
 枝も風情なさそうな花ですもの」

ちよつとしゃれた作りになっている
 横戸の口に、黄色の生絹の袴を
 長めにはいた愛らしい童女が出て
 来て隨身を招いて、白い扇を色の
 つくほど薫物で燻らしたのを渡し

た。
 「これへ載せておあげなさいま
 し。手で提げては不恰好な花で
 すもの」



第七帖 紅葉賀

第七帖 紅葉賀 (大島本)より

本文

渋谷栄一訳

与謝野晶子訳

ちゆうじゃうのきみ
つとめて、中將君、

翌朝、中將の君、

翌朝源氏は藤壺の宮へ手紙を送った。

ごらん
「いかに御覧じけむ。
よし みだごこち
世に知らぬ 乱り心地ながらこそ。

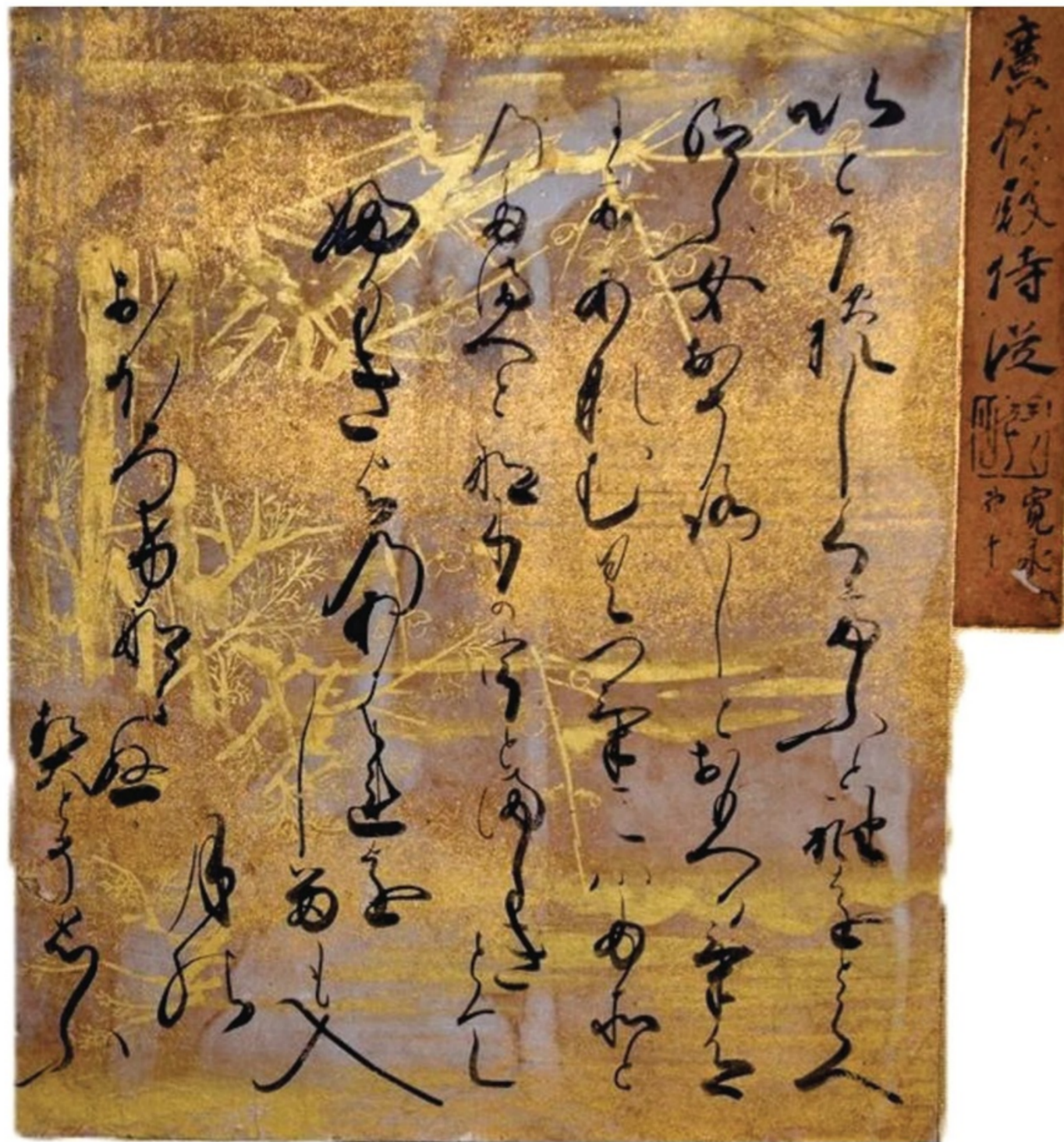
「どのように御覧になりましたでしょうか。
何とも言えないつらい気持ちのままで。

どう御覧くださいましたか。苦しい思いに心を乱しながらでした。

おも たま み
もの思ふに立ち舞ふべくもあらぬ身の
そで ふ こころし
袖うち振りし心知りきや

つらい気持ちのまま立派に舞うことなどはとてもできそうもないわが身が
袖を振って舞った気持ちはお分りいただけたでしょうか

物思ふに立ち舞ふべくもあらぬ身の袖うち振りし心知りきや



第八帖 花宴（明融臨模本）

朧月夜の君物語 春の夜の出逢いの物語

第二段 宴の後、朧月夜の君と出逢う光る源氏二十歳
春二月二十余日から三月二十余日までの宰相兼中将時代の物語

本文

渋谷栄一訳

与謝野晶子訳

いとうれしくて、ふと袖^{そで}をとらへ
たまふ。
をんな おそ おも
女、恐ろしと思へるけし
きにて、

「あな、むくつけ。
こは、誰^たそ」とのたまへど、

なに うと
「何か、疎ましき」とて、

ふか よ し い
「深き夜のあはれを知るも入る
つき
月の

おぼろげならぬ契^{ちぎ}りとぞ思^{おも}
ふ」

とても嬉しくなって、とっさに袖をお
捉えになる。
女、怖がっている様子で、

「あら、嫌ですわ。
これは、どなたですか」とおっしゃ
るが、

「どうして、嫌ですか」と言って、

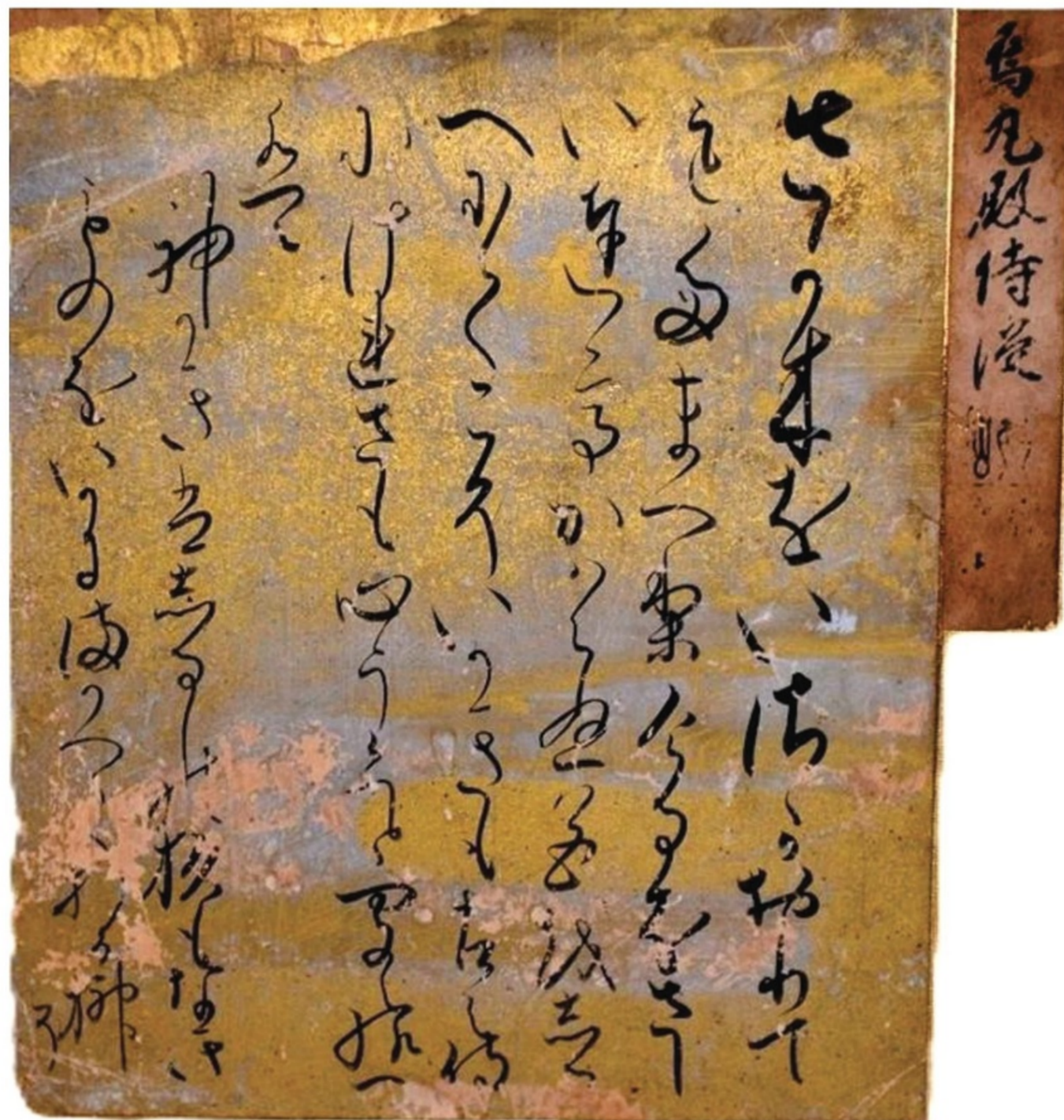
「趣深い春の夜更けの情趣をご存
知でいられるのも
前世からの浅からぬ御縁があつた
ものと存じます」

源氏はうれしくて突然袖^{そで}をとらえ
た。女はこわいと思うふうで、

「気味が悪い、だれ」と言ったが、

「何もそんなこわいものではありませんよ」と源氏は言って、さらに、

深き夜の哀れを知るも入る月
の
おぼろげならぬ契りとぞ思ふ



第十帖 賢木 (大島本)

光る源氏の二十三歳秋九月から二十五歳夏まで近衛大将時代の物語

第一章 六条御息所の物語 秋の別れと伊勢下向の物語

本文

渋谷栄一訳

与謝野晶子訳

さかき ^{を も}
 榊をいささか折りて持たまへりけ
 るを、挿し入れて、

榊を少し折って持っていたの
 を、差し入れて、

さかき
 榊の枝を少し折って手に持
 っていたのを、源氏は御簾の
 下から入れて、

かは いろ
 「変らぬ色をしるべにてこそ、
 いがき こ
 斎垣も越えはべりにけれ。
 こころう
 さも心憂く」

「変わらない心に導かれて、禁制
 の垣根も越えて参ったのです。
 何とも薄情な」

ときわ
 「私の心の常 磐な色に自信を
 持って、恐れのある場所へもお
 たず
 訪ねて来たのですが、あな
 たは冷たくお扱いになる」

き
 と聞こえたまへば、

と申し上げなされると、

と言った。

かみがき ^{すぎ}
 「神垣はしるしの杉もなきもの
 を

「ここには人の訪ねる目印の杉も
 ないのに
 どう間違えて折って持って来た榊
 なのでしょう」

かみがき ^{すぎ}
 神垣はしるしの杉もな
 きものを
 いかにまがへて折れる榊ぞ

いかにまがへて折れる ^{さかき}
 榊ぞ」

参考

我が家の源氏物語図 詞書作者



飛鳥井 雅章

飛鳥井 雅章(あすかい まさあき・1611-79)は、江戸時代初期の公卿。雅庸(まさつね・1569-1615)の第三子で、**初名は雅昭、寛永 10 年(1633)雅章と改名。**

兄雅宣(まさのぶ・1586-1651)の養子となり飛鳥井家を相続、従一位・権大納言に至る。

雅経(まさつね・1170-1221)を始祖とする飛鳥井家は、代々、蹴鞠と和歌の二道をもって聞こえていた。

特に歌道においては、二条・冷泉、両家に代わって台頭しており、また入木道(書道)においても一家をたてた。中でも雅章は、歌人として名高く、後水尾上皇より古今伝授をうけ、慶安元年(1648)の仙洞歌合では歌の善し悪しを判定する判者として列席したこともあるなど、大いに活躍した。その他、権大納言のほか、朝廷と幕府の連絡役である武家伝奏(ぶけてんそう)も務めている。

また、書にも巧みで、雅親の榮雅流(飛鳥井流)の能書としても知られる。この懐紙は、歌題から延宝5年(1677)正月23日、新院(後西天皇)御所で催された御会始での詠である。雅章は同年12月に従一位となっている。

69歳で没する。

時代 江戸時代前期

生誕 慶長 16 年 3 月 1 日(1611 年 4 月 13 日)

死没 延宝 7 年 10 月 12 日(1679 年 11 月 15 日)

改名 雅昭(初名)→雅章 寛永 10 年(1633)

官位 従一位、権大納言

主君 後水尾天皇→明正天皇→後光明天皇→後西天皇

氏族 飛鳥井家

父母 父:飛鳥井雅庸、養父:飛鳥井雅宣

兄弟 雅賢、難波宗勝(雅宣)、雅章 養兄弟:難波宗種

妻 烏丸光賢の娘、四辻公遠の孫娘ら

子 雅知、雅直、難波宗量、雅豊、難波宗尚、中院通躬正室、平松時量室、小川坊城俊広室、吉田兼起室

ウィキペディア(Wikipedia)より



烏丸 光廣(光広)

烏丸 光広(からすまる みつひろ)は、江戸時代前期の公卿・歌人・能書家。准大臣烏丸光宣の長男。官位は正二位権大納言。細川幽斎から古今伝授を受けて二条派歌学を究め、歌道の復興に力を注いだ。

生涯

天正7年(1579年)に准大臣・烏丸光宣の長男として誕生。母は不詳。

経済的に恵まれた環境のもと、同9年(1581年)わずか3歳で従五位下に叙された。弁官や蔵人頭を経て、慶長11年(1606年)1月参議に任じられて公卿に列したが、同14年(1609年)7月に起きた猪熊事件(侍従猪熊教利による女官密通事件)に連座して後陽成天皇の勅勘を蒙り、官を止められて蟄居を命じられた。同16年(1611年)4月に勅免されて還任し、元和2年(1616年)2月権大納言に進み、同6年(1620年)1月正二位に昇ったが、これ以降官位の昇進は見られず、寛永15年(1638年)7月13日に薨去。享年60。初め西賀茂靈源寺に葬られたが、寛文3年(1663年)7月洛西太秦の法雲院に移された。法名は法雲院泰翁宗山。伝記に孫・資慶による『烏丸光広卿行状』がある。

後水尾上皇からの信任厚く、公武間の連絡上重要な人物として事あるごとに江戸に下り、公卿の中でも特に江戸幕府側に好意を寄せていた。また、自由闊達な性格で逸話にも富み、多才多芸な宮廷文化人として、和歌や書を得意とした。とりわけ和歌は慶長8年(1603年)に細川幽斎から古今伝授を受けて二条派歌学を究め、将軍・徳川家光の歌道指南役をも勤めている。書については、大変ユニークではあったが、寛永の三筆に決して劣らず、光広流と称される。本阿弥光悦や俵屋宗達など江戸の文化人と交流があり、また、清原宣賢に儒学を学び、沢庵宗彭・一糸文守に帰依して禅をも修めた。

時代	安土桃山時代 - 江戸時代前期
生誕	天正7年(1579年)
死没	寛永15年7月13日(1638年8月22日)
別名	烏有子、腐木(号)
戒名	法雲院泰翁宗山
墓所	法雲院(京都市右京区)
官位	正二位、権大納言
主君	正親町天皇→後陽成天皇→後水尾天皇→明正天皇
氏族	藤原北家真夏流日野家支流烏丸家
父母	父:烏丸光宣
妻	正室:結城鶴子(江戸鶴子) [前結城秀康 正室] 継室:村上頼勝娘
子	光賢、勘解由小路資忠、六角広賢ほか

ウィキペディア(Wikipedia)より